

IL-12 inducer (複合キノコ菌糸体成分) と Angiogenesis (β -シャーク) を用いた癌治療

八木田 旭 邦 (近畿大学・腫瘍免疫等研究所教授)

フランシスコ・コントレランス (メキシコオアシス病院院長)

IL-12は癌治療を施行するために最も理想的なサイトカインの一つである。しかし、Recombinant (xt) IL-12は副作用が強くその臨床応用に困難をきたしている。一方、自然界にはこのIL-12誘起物質が少なからず存在することを見出した。なかでも、比較的高い値のIL-12産生物質であるキノコ菌糸体成分であるAHCCとPSKを用いて臨床的検討を行ってきた。この自己生成したIL-12は、xt-IL-12と分けるためにnatural IL-12 (nIL-12)と呼んでいるが、極めて微量の産生能力で臨床的改善度も高いことが判っている。

また、IL-12産生能力にも感受性に差が認められ、Th1系の動物及びヒトではAHCCが有効で、Th2系の動物及びヒトではPSKが高いIL-12産生能力があることを見出した。また、IL-12誘導には時差があり、TNF α 、IFN γ そして最後にIL-12が誘導されることも判っている。更にnIL-12誘導を行った場合有効すなわち腫瘍消失の時期に差があることも判っている。極めて早期(1ヶ月以内)に腫瘍の縮小(消失)が始る早期有効グループ、3~4ヶ月に腫瘍が縮小(消失)する中期反応グループ、そして1年以上のNC後に縮小(消失)する晩期反応グループの3形態である。

また、動物及びヒトにおいても早期癌であれば自己IL-12は産生されるが、癌が進行するとこのnIL-12の産生能力は極端に低下し、IL-12誘起剤の投与により初めて誘導されること、そして担癌であるかぎりIL-12の産生が認められ、腫瘍の完全消失にはIL-12の産生能力の産生低下の確認が必要である。

現在まで1863例の症例中5.3%にCR、16.3%にPRの成績が得られ、乳癌、肝癌、睾丸腫瘍、肺癌に有効性が高いことが判っている。